

「角材とヘルメット」の象徴したもの

1

中大的学生会館問題はやつと終わった。単独学生会館要求闘争からあしかけ四年になる。処分闘争に勝利はしたけれど、もう僕は大学に戻るつもりはなかった。大学は退学のままにしておいた。処分反対闘争を担つてくれた人には悪がつたが、闘争の中で僕の考えは十二分に展開したからわかつてくれると思った。

親にまた大學に戻るとは言えなかつたこともあるが、大學問題についてはやるべきことはやつたという気がした。実際はこの後に、日大闘争や東大闘争などのいわゆる全共闘運動が起つて、そして、それに闘うことになるが、それは運動の高揚がもたらしたもので、個人的にはもう十分だと考えていた。

一九六六年の十二月には三派全学連が再建された。考えてみれば全学連の再建に取り組んでからかなりの時間が経つていて、一九六四年には三派の東京の組織である都学連はできていたけれど、全学連の再建まではなかなか進まなかつたのである。一九六五年以降、急速に高まつてきた大衆的運動に押されて再建は進んだことになる。再建された三派の委員長には明大の斎藤彦がなつた。斎藤はブント系のメンバーであった。この再建大会は確か、明治大学で開かれたが、當時、明治大学は学費値上げ反対闘争が展開されていた。パリケードで大学は封鎖中であつたが、この中で開かれたようだと思う。この全学連大会には中大のパリケードから参加することになるが、この大会に党派はそれぞれの色のヘルメットを着用した。

三派内部の小競り合いは結構きつかったのである。中大では学生たちがヘルメットに赤色のペンキを塗つていた。どうしたのだと言うと、どうせメットを着けるならテレビ映りがいいから赤がいいという意見だつた。闘争しながらテレビ映りを気にするなんておかしいと思うかもしれないが、そういうことに敏感だったのである。

赤はいいけどベンキ代が大変だと冗談を言い合つた記憶がある。一九六〇年代の後半に誕生したブント系の赤いヘルメットはこうして生まれたのである。大学の自治会室で赤いペンキを塗つたヘルメットを乾かしている光景が目に浮かぶ。あのころ楽しそうにベンキを塗つていた活動家はどうしているのであらうか。広島カーブの赤ヘルメットが登場するよりもずつと前である。

明大の学費闘争のことは気になつていて、僕は中大の学生会館闘争で身動きがとれず年が明けたらと思っていた。年が明けてもう一九六七年に入つたけれど、僕は相変わらず中大の学生会館の戦後処理などに時間を取っていた。そうこうしているうちに明大の学費値上げ阻止闘

争が緊迫を増してきた。

一月末の大衆団交は体育会や右翼に粉砕され、パリケードは撤去されていた。そして二・一協定という調印をやつてしまつた。曉のホテルで行われたが、これがどういう経緯で行われたのか、いまだその真相はわからない。

その日、僕は下宿に帰つていた。当時は結婚してたので、このときは比較的家に帰つていたのであるが、新婚早々からパリケードの中にいたので、このときは比較的家に帰つていたのである。朝方、ブント系の学生が二、三人やつてきた。ただならぬ様子なのでどうしたのかと聞いたら、明大でボス交があり、中大の学生会館も他党派に襲われているということだった。

明大のメンバーと中大メンバーは親しい関係にあった。一九六〇年の安保闘争では明大と中大の部隊はだいたい先頭を受け持つていた。そして社学同では独立社学同として近い存在だった。だから、このボス交渉に僕も闘うしているかもしれないということで調査を兼ねて学生を寄越したのかもしれない。明大の学生運動とは近い関係だったが、明大の運動にはちょっと危惧するところもあつた。

中大に比べる大衆運動といつても、どこか脆弱なところがあるので見えた。明大では社学同が継続的に指導部をつけていたが、それでやはり官僚化しているところが感じられた。この危惧が的中したように思えたが、深夜に指導部だけホテルで調印するなど中大では考ふられなかつた。同じ内容の調印をするにしても、中大ならば、大衆的な討議にかけてやるだらうと思った。少なくとも僕なら全学投票などの方法を取つたと思う。

このことでブント系は革共同中核派や社青同解放派などから批判され、困難な目にあつた。できたばかりの三派全学連の委員長は斎藤から中核派の秋山勝行にかわつた。斎藤は明大での今度の行為に関係しているとみなされたからである。

僕は明大の連中のやり方が稚拙であると思ったし、やり方には批判的であつたが、ここには政治党派と学園闘争との関係が鋭く示されているようにも見えた。そういう観点に立てば、明治の指導部をむげに批判はできないところもある。そう感じた。

この問題を革共同の中核派は斎藤委員長追い落としの絶好の機会とした。彼らはブント批判に精を出していた。これは政治集団の動きとしてはやむをえないにしても、大学問題をどう理解しているか、ということは別のことであった。

大きな流れとなりはじめていた大学闘争はほとんどわかつていなかつた。

その社会的な側面をどう理解するかの視点はほとんどなかつたのである。大学闘争は社会運動であつて、いわゆる政治運動ではなかつた。高度資本主義の展開の中で、学生（知識人）の存在様式（自己を支えている価値観や社会との関係のイメージ）が変化しつつあること、その危機感のあらわれとしての反抗意識を基本にしていた。大学と社会権力の在り方にに対する異議申し立てなのである。学生という現在の社会的な関係が変貌していくことへの対応だったのである。政治党派は古典的な大学像や知識人像しかなく、その反抗の意味も反抗的な意識も理解していなかつたのである。辛うじて行動形態の急進性を支持するところでつながつては過ぎない。このことは中大での学生会館闘争をやりながら痛いほど分かつていて、その後の日大闘争や東大闘争がノンセクトラジカルという部分に担われた必然性を示していた。僕は明大にあらわれた問題は、この政治集団と大學闘争の不幸な関係を示しているようで、他人ごとではないと受けとめていた。